

図書だより

第52号
平成24年2月29日
呉工業高等専門学校
図書館
<http://www.lib.kure-nct.ac.jp>



灰ヶ峰からみた呉市の夜景 (撮影：呉高専建築学科1年 石井拓也)

目次

・ 巻頭文 新鮮な「図書だより」を目指して	図書館長 笠井 聖二	2
・ 平成23年度校内読書感想文コンクールの表彰式		3
・ 第8回校内読書感想文コンクール			
最優秀賞			
「スティル・ライフ」(池澤 夏樹 著)	M1 東 隆成	4
「容疑者Xの献身」(東野 圭吾 著)	E1 竹寄 幸之助	5
「罪と罰」(ドストエフスキー 著)	E2 一瀬 直人	6
「なぜ日本の若者は自立できないのか」(岡田 尊司 著)	E3 森本 大貴	7
「論文はデザインだ!」(渡邊 研司 著)	A4 中村 和宏	8
優秀賞			
1年生の部	C 岡部 知里 C 中曾 萌 A 佐々木 知菜 A 志毛 登 A 伊達 千尋	9
2年生の部	M 尾越 匠 E 中島 健吾 E 溝口 聡一朗 A 清水 千夏子	14
3年生の部	M 横部 健 E 川口 竜弥 C 菅 聡司 A 山田 萌子	18
4・5年生の部	A 横山 貴史 M 安田 祥隆	22
・ 私の推薦図書			
「しがらみ」を科学する(高校生からの社会心理学入門) / 山岸俊男			
中国化する日本(日中「文明の衝突」一千年史) / 與那覇潤	自然科学系分野 林 和彦	24
プログラムはなぜ動くのか			
●知っておきたいプログラミングの基礎知識● / 矢沢久雄	機械工学分野 山田 祐士	25
歴史小説、ミステリー、自己啓発書など	環境都市工学分野 山岡 俊一	26
・ 行事報告 平成23年度第2回ブックハンティング	学生会文化副委員長 麻村 晶子	27
ブックハンティング図書紹介			
・ 編集後記			

巻頭文

新鮮な「図書だより」を目指して

図書館長 笠井 聖二

今回の「図書だより」を見て、「あれっ」と思った方もおられるかもしれません。そうだとすると、私は少し嬉しいです。実は今年度2回目の発行になります。・・・「なぜ？」

「図書だよりを読んでいますか?」、「図書だよりが出るのを楽しみにしていますか?」という問いに、「はい」と答えてくれる人は少ないと思います。・・・「残念！」

「読まれないなら、無駄だから止めたら」という声が聞こえてきます。「よし!もっともらしい理屈をつけて止めてしまえ。これで、面倒な仕事もひとつ減るな!」という私の中の囁きがあります。・・・「甘い誘惑？」

こうして、今年度2回目の「図書だより」の発行となりました。・・・「意味不明？」

今まで、「図書だより」は年1回の発行のため、新任の先生の本の紹介が、年度の終わり近くに出るというようなこともありました。また、1年間分の盛り沢山な内容のため、作るのも・読むのも大変ということになっていました。そこで、読んだ人が普段の学校活動を思い出し、「図書だより」を身近に感じてもらうために、少しでも時期にあった内容の季節感ある「図書だより」となるように、今年度は2回に分けてみました。

「図書だより」を読んでもらうための試みは、他にもあります。よくある「読者参加」です。即ち、学生の皆さんに協力してもらうことです。前号から、表紙の写真を、写真部において、学生の作品に変更しています。学生会と連携して実施しているブックハンティングの記事では、文化委員長や副委員長に報告を書いてもらい、更に、本を選んだ学生のショートコメントも載せるようにしてみました。

これまでも、皆さんにお願いした原稿で「図書だより」はできていましたから、その意味では、少しやり方を変えたに過ぎないだけかもしれません。それでも、ちょっと新鮮な「図書だより」になったと思います。内容を楽しむのとあわせ、どんなところに、我々の苦闘の痕が見られるか、探してみてください。

私は、図書館長になり当分の間は、「図書だより」ではなく「図書館だより」だと思っていました。この名前の違いにより、内容がどれだけ変わるかはわかりませんが、本来、“違う”はずです。私自身が「図書だより」のことを、しっかりと考えていなかったのだと反省しています。

学生寮では、「こげむすび」という寮生会誌を出しています。このような愛称をつけるのもいいかなと思っています。でも、なぜ「こげむすび」という名前なのでしょう。・・・。

平成23年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成23年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

1年機械工学科	東 隆成
1年電気情報工学科	竹寄 幸之助
2年電気情報工学科	一瀬 直人
3年電気情報工学科	森本 大貴
4年建築学科	中村 和宏

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第8回になります。学生は、

- 1年生：芥川賞・直木賞
- 2年生：本校教員が選定した課題図書
- 3年生：ノンフィクションなど政治経済に関する本
- 4年生以上：自由

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教職員がおこないますが、学年によっては、名前を伏せた上で学生の感想を聞くという、学生による評価もおこなっています。

4年生以上の応募が0件というのが続いていましたが、今年は応募があり、選考が大変でしたが、応募が増えたことは嬉しい限りです。

校長からは、「これからも、どんどん本を読んで下さい」という言葉もありました。是非、多くの学生に、たくさん本を読んでもらいたいと思います。



第8回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部



機械工学科 東 隆成

ステイル・ライフ

池澤 夏樹 著

「ステイル・ライフ」

—— 人生観と物事の捉え方 ——

「生きるべきか死ぬべきか。それが疑問だ。」シェイクスピアの残した格言の中にこのようなものがある。私は最初にこの格言を見たとき、この人はなんてふざけたことを言っているのかと疑問に思った。同時に何故これが格言として共感を集めているのかも不思議に思った。死ぬべきことなど無い、生きるのが当たり前だと思っただ。しかし私は『ステイル・ライフ』を読み、哲学的にだがこの格言を自分なりに解釈出来たと思う。

主人公の「ぼく」は工場でアルバイトとして働いていて、そこで佐々井という不思議な男と出会う。佐々井は世界の全てを悟っているように見えて、ぼくは段々と佐々井の話や考え方に引き込まれてゆく。そして佐々井がどこかへ去ったあとも、ぼくは佐々井をどこか遠くで光っている天体のように感じて、忘れることはないだろうと思うのだった……。

およそこのような話で、佐々井という不思議な男に対するぼくの感想や、佐々井に影響を受けて物事の考え方が変わったぼくについて書かれている。

この本の開始数ページ目に「大事なものは、山脈や、人や、染色工場や、セミ時雨からなる外の世界と、きみの中にある広い世界との間に連絡をつけること、一步の距離をおいて並び立つ二つの世界の呼応と調和をはかることだ。たとえば、星を見るときは」と記述されている。最初から読者を独特の世界観へと誘うこの文章だが、この文章から読み取れる大事なことは、自分自身と世界との繋がりを認識して、自分と世界のどちらに傾いたりもせずに純粹に物事を受け取るということだと思ふ。自分だけ見て世界を拒絶したり、世界を見て自分を全く見なくなったりしてしまうと、人生はつまらなくなってしまうだろう。私はいつたい、そのような生き方が出来るのだろうか。自分中心にはなりたくもないし、社会にあわせて自分を殺したいとも思わないが、うまく調和の取れた人生が送れているかという、はつきりとは答えられない。

また佐々井がぼくに向けて言った言葉で「むずかしいことじゃないんだよ、心の一部を軌道に上げておくのは。誰だつてやれる。」というのがある。心の一部を軌道に上げるとはおそらく、自分をどこか高いところから見つめてみる、ということだろう。自分と世界を客観的に見ることで、物事の真価を知ることが出来るということだろう。今自分が、世界にとってどういう存在で、どのような役割なのかを理解してしまえば、ゆとりを持って生活できるといふことだろう。

ここで文頭に返るが、シェイクスピアの「生きるべきか死ぬべきか。それが疑問だ。」という格言が何故多数の人々に支持されているのだろうか。それはこの格言には「自分が生きていく意味とはいったいなんなのだろうか、私はこの世界に生きていくが、世界は私を必要としているのだろうか。」という不安が含まれていると思ふ。有名な劇作家であるシェイクスピアは、その作品で様々な人に感動を与えたが、有名な人でも人並みに不安になるということに、人々は共感を覚えたのではないだろうか。生きるということは、自分ひとりでは成り得ない。人々との繋がりの上で、ようやくそれを共感できる。しかしそれでもいつかは飽きが来てしまう。そんなときには、少し休んで自分と世界の繋がりを再確認すればいい。たとえば、星を見るときはだ。

『ステイル・ライフ』を読んで、人生に対する構え方を変えてみようと思った。人との繋がりを忘れず、けれど自分をしっかりと持って、生きていこうと思ふ。

1年生の部



電気情報工学科 竹崎 幸之助

容疑者Xの献身

東野 圭吾 著

『容疑者Xの献身』を読んで

——「思い込みによる盲点」——

「これまでに、思い込みで物事を判断した経験が一度でもありますか。」この質問をされて、「いいえ」と答えられる人はまずいないだろう。「絶対にそうだ」「そうでなければおかしい」などは、自分の意見が正しいと確信しているからこそ言ってしまう思い込みの一種なのである。

この本は、花岡靖子とその娘・美里が離婚後もしつこくつきまとう元夫・富樫慎二を殺害してしまう所から始まる。その事態に気づいた隣人の石神は靖子に好意を持っており、事件の隠蔽に協力する。刑事である草薙は靖子の不十分なアリバイに疑問を持つが、捜査を進めるほど靖子が犯人である可能性が低くなっていく。草薙の友人である物理学者・湯川は石神との旧友でもあり、ふとしたきっかけから石神の事件への関与を疑う。警察が捜査を進められない中で、湯川はただ一人真相を見抜く。事件の背景には「思い込みによる盲点」が存在していた。

石神が数学について語る場面に、「間違ったルートを進み、偽の宝物に辿り着いて

いる結果について、その宝が偽物だと証明するのは、時に本物を探すよりも難しい場合がある。」とある。私はテストを見直す時がこれに当てはまると考える。私はケアレスマスが多い。特に計算間違いが多発するのは数学、物理である。これらの教科の見直しをする時、宝探しに喩えるなら「発掘ルートをなぞる」事しかしていなかった。つまり最初の解き方を上からなぞってそれを「見直し」として確認作業を終えていた。この方法では、途中でミスをしていても気づきにくい。そのため、ケアレスマスがなかなか減らなかったのだ。これからは「その答えが唯一の解答だと断言できる」まで確認作業を行わなければならないと痛烈に思った。

この小説の骨子である「思い込みによる盲点」は、石神が警察に仕掛けたトリックそのものだった。実は、警察が富樫慎二だと信じていた死体は全くの別人だったのである。湯川は「殺されたのは富樫憲二、怪しいのは花岡靖子、そういう構図を作り上げ、警察がその固定観念から離れられないようにした」と言っている。また、草薙も「警察は彼女を疑い続けた。だが彼女を疑うということは、即ち、死体が富樫であることを疑わない、ということになる」と言っている。靖子のアリバイトリックを崩せば事件は解決する、と「思い込んでいた」警察の盲点をついた、見事なトリックだと驚嘆した。と同時に、思い込みは恐ろしい事だと改めて痛感した。

この世の中、思い込みで得られるものは自分に対する自信くらいである。反対に、思い込みによって失うものは思考力だが、この事は重大だ。なぜなら「自分は絶対に事故に遭わない」「絶対に事故を起こさない」と思っている人ほど事故に遭うし、事故を起こしてしまうからである。私はその理由を、思い込みが原因で気が緩み、不注意を引き起こすためだと考える。

しかし、私も思い込みによる気の緩みがないとは言えない。今はまだ何事も起きていないから良いのだが、今後何も起こらず平穩無事に過ごせる保証は全くない。思い込む事の危険性に気づいた今こそ気を引き締め、湯川のこの言葉を心に留めて日々過こしていく。

「思い込みはいつだって敵だ。見えるものも見えなくしてしまうからな」

2年生の部



電気情報工学科 一瀬 直人

罪と罰 ドストエフスキー 著

『罪と罰』を読んで

「人類は凡人と非凡人に大別される。大多数の人間は凡人であり、現行秩序に服従することを義務とする。選ばれた少数の非凡人は、人類の進歩の為に新たな秩序を作る人であり、その実行のためには現行の法や秩序を踏み越える権利を持つ」

これはこの物語の主人公、孤独な貧乏学生であるラスコーリニコフの理論だ。この理論に従い、彼は妄信する。「自分は言われるままに生活し服従するだけの凡人なのだろうか。いや違う。自分は選ばれた非凡人、英雄なのだ」と。そしてラスコーリニコフは大義をなすための第一歩として強欲狡猾な高利貸しの老婆殺害を実行する。この事件は多くの偶然が重なり、ほぼ完全犯罪に近いものになるのだった。しかしこの事件後、彼は良心に苛まれることになり、烈しい精神錯乱状態に陥る。それでもなお彼は信念を曲げることはなかった。

彼の理想は、理論によって正当化された殺人で富と権力を獲得し、その富と権力によって新しい世界を作ることだった。そんな彼の元へソーニャという娼婦が現れる。彼女は他人のために自分を殺してしまうほどの自己犠牲精神と、慈愛の心を持

つ。そんな彼女が無意識に目指していた理想は、富も権力もない兄弟愛の世界だった。彼は彼女の愛に負けて罪を自白する。さらにシベリアの流刑地にて、ついに彼女の信念にも負けてしまうのだ。しかしラスコーリニコフはソーニャの愛によって目覚め、彼も彼女を愛していることを自覚する。愛によって二人は蘇り、後生への道を進んでいくのだった。

この物語の名前にもなっている「罪と罰」。何が罪で何が罰なのか。そもそも罪とは、罰とは、一体全体どういうものなのだろうか。この2つについて暫く考えてみると、自分の中で様々な意見がもやもやと思いつかひび、ぶつかり合ったが、結局僕には上手く結論を出すことがどうしてもできなかった。しかしこの本を読んだことで、人間について深く考究することができた。

ラスコーリニコフは孤独だった。僕は、この孤独が彼の心をむしばんでいたのではないかと思う。それに加えて彼は鋭敏な頭脳を持っていたため、あの理論に至ったのだろう。そして究極的に自分が特別な存在であり、英雄になり得る非凡人だと妄信してしまった。彼のように、自分が特別であると考えたことがある人はどれほどいるのだろうか。僕はそういう存在になることに憧れたことが多々ある。しかしこの物語を読み終えたことで、それは間違いであることを痛感した。人にはそれぞれ違いはあれども優秀はなく、誰もが平等で生きる権利を持っている。もちろん人が人を傷つける権利はない。しかしラスコーリニコフの理論では、英雄が大義をなすために殺人は正当化される。確かに世界中で戦争が起きていた時代では、ナポレオンのような殺人を犯しても偉業をなした人たちは英雄とされていた。しかし現代では違う。たとえ微細な罪悪でも、罪を犯す特別な存在、英雄はいてはならないのだ。そして罪を犯した人は罰を受けなければならない。良心に容赦なく苛まれるのだ。ラスコーリニコフは自分を非凡人だと妄信することで罪から逃げていたが、ソーニャの無償の愛のおかげで向き合うことができたのだと思う。そう、つまり人は人と支え合うことで困難を乗り越えられるのだ。

人類は凡人にも非凡人にも分けられず、皆平等である。だから僕はラスコーリニコフの理論は間違いだと思う。新たな秩序を作るのも英雄がなすことではなく、人々が協力してなすことなのだ。そのために自分は特別であるという妄信にとらわれることなく、自分自身を受け入れて生きていくことが大切である。

3年生の部

なぜ日本の若者は自立できないのか

岡田 尊司 著



電気情報工学科 森本 大貴

「自立する」ということ

ぼくは、自分の意見を主張するのがあまり得意ではない。もし、自分がこう言ったら相手はどう思うのか、嫌われたり、からかわれたりしないか、などいろいろと考えてしまうからである。しかしこの本を読んで、このままでは社会に出てもやっていけないと強く感じた。

現在、日本にはひきこもりと認められる成人が七十七万人いると推測されている。さらに予備軍は百五十万人以上に上るといふ。日本がこのようなひきこもり大国になってしまったのは個人に責任があるとは一概には言えない。そうってしまったのは日本の教育に問題がある、と著者は言っている。

ひきこもりになってしまう原因として、対人関係やコミュニケーションの訓練の場が不足していることが挙げられる。実際にぼくも人と会話をするにあまり慣れていないので、先輩や先生など年上の人と話すときは、とても緊張して上手く喋れないことがある。だが、ぼくと同じような人間は、社会に出ている成人でもたくさんいるようだ。ではなぜコミュニケーション能力が充分でない成人が社会に出て野放しにされているのか。それは近年ではマークシート方式のセンター試験が増えてきているからである。たとえ、センター試験やペーパーテストの点数が良くても、コミュニケーション能力が養われていなければ社会に出ても上手くやっていけない。そこで重要になってくるのが、考えを文章にまとめたり、討論をしたり、チームで学習を進めたりする作業である。思い返してみれば、小学校ではよくこのような作業を行っていたが、中学校、高校と学年が上がるにつれてその機会は減ってきているように感じる。

このように、日本の若者が自立できない理由は、日本の教育の仕方に問題がある。ここで、学外の教育の仕方について考えてみる。

日本では、同じことをすべての子どもが学ぶことが平等であるという意識が強い。しかし、そうした教育を続けている国は、先進国の中では特異で、海外の教育は、内容においても方法においても、もっと多様なものである。ここでは二つの国を例に挙げてみる。

まずオランダでは、子どもの特性や親の考え方によって様々なスタイルの教育を自由に選ぶことができる。一方、すべての生徒が同じ教育を受けるという原則を維持しながら、学校の仕組みや授業の方法を工夫することによって、多様な特性や能力に対応しようとして成功しているのが、フィンランドである。

詳しく見てみると、オランダでは本人の可能性を最大限に伸ばせる学校や教育がなされている。成績には順位をつけず、理解できた子が、まだ理解できていない子を教えるという教え合いを教育の根幹として利用している。ぼくはこれはとても素晴らしいことだと思う。友達同士の方が質問もしやすいはずだ。またフィンランドでは、四、五単位のグループ学習を取り入れた。科目ごとに、得意な子が不得意な子を教えるというやり方にしたのである。

この二つの国には共通がある。それは、どちらもテストや競争をあまり重視しないということである。それに対して、競争を重視し、一部のエリートを国のリーダーとして育てることに熱心な国もある。こうした国々は、子どもの間で学力の格差が広がり、落ちこぼれが生まれてしまう。

すなわち、一人ひとりが競争していく世中ではなく、みんなで助け合い、意見を出し合うことが自立にも繋がるのだ。

一人の子どもに対して、その子のもつ特性が活かされるように日本の教育の仕組みを変えていくことが「自立する」ための第一歩なのである。

そして自分自身で他人と交流する機会を見つけ、積極的に足を踏み入れていくことが、今の自分には必要だと思う。

4・5年生の部

論文はデザインだ！

渡邊 研司 著



建築学科 中村 和宏

『論文はデザインだ！』を読んで

建築学科のある大学の多くは、卒業研究として卒業設計または卒業論文の提出を義務づけています。

卒業設計は建築学科で学んだ4年間の集大成ということもあって、将来建築家を志願する学生の多くはこちらに挑戦すると思います。卒業生の作品集というかたちで書籍に掲載や卒業設計日本一を決める卒業設計の甲子園ともいえるような大会も存在するのです。このように、卒業設計にはいろいろな発表の場が設けられているのです。

一方、卒業論文はどうでしょうか。私は卒業設計に比べるとどうも地味な感じがしてなりません。もちろん素晴らしい論文を書けば、日本建築学会の優秀卒業論文賞なるものに応募できるでしょうし、大学によっては、優秀論文賞を設けているところもあります。ですが、卒業設計に比べると、華やかさに欠けていると私は思うのです。

ところが、この本によると一概にはそうといえないことがわかるのです。多くの建築家が、自らの建築論なるものを書いています。建築雑誌などには、その建築家が影響を受けた建築家の作品を挙げているのをよく目にしますが、建築作品というよりは建築家の主張や建築史家を書いた本に影響を受けたという建築家も多いのです。例えば、ローマ時代のヴィトルヴィウスをはじめ、レオン・バティスタ・アルベルティ、アドルフ・ロース、ル・コルビュジエ、ロバート・ヴェンチューリ、磯崎新、黒川紀章などは、建築作品という

よりはむしろ建築論に影響をもったといえる人物だと挙げられています。

以上のことから、論理性をもつということに重要性を感じました。設計することと論文を書くことは全く違うことであり、脳でも使っているところは全然違うところだそうです。ところが、プロセスは同じところにあると思うのです。だから「自分は論文を書くのが苦手だから卒業論文ではなく、卒業後にいろいろと有利になりそうな卒業設計にしよう」などと思っている人は間違っているのです。まともな文章を書けない人は、大した設計もできるわけありませんし、キチンと物事を考えることができるような社会人にもなれないと思うのです。

そもそも論文とは形式を守って書かれた文章ですから、極端な話だと「問題提起→主張→根拠」といったような約束さえ守れば誰でも書くことができます。この一連の流れこそが“論理性（ロジック）”なのです。

例えば、小説の中に登場する探偵が犯罪を立証するのにコレは必要ですし、その小説を書く小説家にも、この論理性（ロジック）は求められるのです。もちろん、このような読書感想文にも。

このように、論理性（ロジック）というものはここに書いたことに限らず、さまざまなところに必要とされているのです。ですからこのようなものが存在するということが自体を知ることによって、今後活かされてくると思うのです。今回はそういったモノの存在を知ることができる良い機会でした。

優 秀 賞

1年生の部

下町ロケット

池井戸潤 著

環境都市工学科 岡部 知里

『下町ロケット』を読んで

—— 働くとは何か。 ——

下町ロケットは、どこにでもある一般に中小企業と呼ばれる小さな町工場での主人公である社長の佃と社員たちの話です。佃は、幼い頃から宇宙に対する興味がありロケット工学へ進むが打ち上げに失敗してしまい、実家の精密機械造を業種とする佃製作所を継ぐことになってしまいます。それから佃は大学と研究所で得たエンジンの技術を活かし売り上げが三倍になったりと社長業で成功を収めます。しかし、主要取引先と取引終了してしまつてから佃製作所はたくさんの問題をかかえることとなります。ライバルの企業から無実なのに訴えられたり、銀行から融資が受けられなくなり、資金の繰りこし難や若手からの反発などを通し、佃は社長と社員の関係、会社の在り方、仕事とは何かについて悩み、葛藤しながらも、一つずつ答えを出していきます。

働く、仕事というお金を稼ぐためにしなくてはならないことというイメージがあります。でも働くということとは本当にお金を稼ぐためだけのものなのでしょうか。また誰のために働くのでしょうか。

物語の後半は、佃製作所に水素エンジンの開発で先を越された帝国重工との話です。帝国重工は新型エンジンを搭載したロケットの打ち上げを成功させるために佃に特許を売って欲しいと申し出ます。しかし佃は他社に売るつもりで開発した訳じゃないと断り、特許使用許諾契約なら

と提案します。やむを得ず帝国重工は特許使用許可をもらいに来ますが、佃は、研究者としての挫折から逃げず夢をかなえるために部品供給をしたいと言います。その佃の言葉に若手社員を中心に何人かの社員が会社は社長の私物じゃないと反抗します。社員の気持ちがいばらばらになってしまった時、部品供給のための帝国重工による佃製作所のテストが行われました。落とすための厳しく理不尽なテストに反発していた若手社員のプライドが傷つけられてしまい、プライドを取り戻すために佃品質、佃プライドと一致団結します。そして、一つずつ順調にテストに合格していきませんが、一番大事な品質テストで異常値が出てしまいます。それは、不満を持っていた社員の一人が不良品と交換していたからでした。佃はその社員が不満を抱えているのに気づかなかつた自分に腹が立ちながらも責任を取って辞めるという社員に対して、

「お前が辞めたところでなんの解決にもなりやしない。信用っていうのはな、ガラス製品と同じで一度割れたら元にもどらないんだよ。なんでそんな簡単に辞めるっていえるんだ。俺はな、仕事っていうのは、二階建ての家みたいなものだと思ふ。一階部分は、飯を食うためだ。必要な金を稼ぎ、生活していくために働く。だけど、それだけじゃあ窮屈だ。だから、仕事には夢がなきゃならないと思ふ。それが二階部分だ。夢だけ追っかけても飯は食っていけないし、飯だけ食っても夢がなきゃつまらない。お前だって、ウチの会社でこうしてやろうとか、そんな夢、あつたはずだ。それはどこ行っちゃったんだ。」と問いかけます。

私は、佃のこの言葉に働くとは何か、誰のために働くのかの答えがあるのではないかと思ひます。お金を稼ぐことは重要です。しかし、その仕事に夢やプライドを持てるように働くこともまた重要だと思ひます。十年先も二十年先も夢を持ち続け、自分のために働くことが結局は、家族のためにお金を稼ぐことにもつながっていくのではないのでしょうか。これは今の自分にも言えることで、夢を持ち、単位を取るためになんとなく勉強するのはなく、自分のために勉強することが大切で、それが自分の将来につながっていくのではないかと思ひます。

鉄道員(ぽっぽや)

浅田次郎 著

環境都市工学科 中曾 萌

『鉄道員』
ぽっぽや

——最後まで鉄道員だった男——

私は、娘を亡くした日も、妻を亡くした日も、駅に立ち続けた乙松さんに共感します。

乙松さんが立っている駅に、生まれてふた月で死んでしまった娘を乗せた気動車がやって来ましたが、乙松さんはいつも通りホームで旗を振って迎えました。それから約十五年絶ったある日も、乙松さんは、妻の危篤の報せを何回も聞いていたにも関わらず、全て仕事を終わらせて最終の列車で病院へ向かいました。しかし、最期を看取することはできなくて、薄情者だと言われてしまいます。

けれども、もし私が乙松さんと同じ立場に置かれたとしても、同じようにしていたと思います。なぜなら、その仕事は自分にしかできなくて、だからこそ自分の仕事に最後まで責任をもたなくてはならないと思うからです。

(俺はポッポヤだから)

と言って決して涙を流すことのなかった乙松さんは、ほんとの「ポッポヤ」です。だけど、きっと妻や娘の死を一番悲しんでいたのは乙松さんです。だから、旗を振って死んだ娘を迎えなければならなかったときは誰よりも辛かったと思うし、自分を責める気持ちもあったと思います。

ある日突然見たことのない小さな女の子が乙松さんの前に現れ、そのときから少しずつ大きくなっていく顔のよく似た姉と思われる女の子がたびたび乙松さんの元へ訪れるようになりました。自分の子も、生きていたらこんなに成長していたのだ

ろうと自分の娘と重ねていた乙松さんは、今まで見た子供達が成長していく自分の娘だったことを知りました。

「おめえ、ゆうべからずっと、育ってく姿をおとうに見せてくれたってかい。」

「あたしも何ひとつ親孝行もできずに死んでしまったでしょ。だから」

「ここで乙松さんは、たまらず涙をこぼしてしまいます。この場面を読んだとき私は、乙松さんがずっと娘を大切に思っていた気持ちには娘にも伝わっていたんだと、親子の強い絆を感じました。誰も理解しなかった乙松さんの旗を振ったときの気持ちは、死んだ娘にはしっかり伝わっていたから、成長を見せてくれたのだと思います。仕事のために大事な娘を傷つけてしまったかもしれないと、ずっと自分を責め続けていた乙松さんにとって、娘の成長を見ることができたのは、きっと何よりも嬉しかったはずですよ。」

この作品を読み終えたとき、私はあることに気付きました。それは、大人になり社会で働いたり、親になるということは、責任を負うということであり、そのためには何かを犠牲にしなければならないときがあるということです。乙松さんは、仕事のために家族を犠牲にしまいました。それは、仕事に対しての責任感が強い人だったからだと思います。責任を果たすため、辛いことを避けられないことがあるかもしれない。だから、責任をもつという言葉の重さを改めて感じることができました。

今、子供を殺したり、育児放棄をする親がたくさんいます。子育てのせいで、自分の自由が奪われるのが嫌だという人がいるからだと思います。しかし、子供を産んで育てるということは責任をもつということであり、そのために自由が犠牲になることは仕方ないことです。一度決心したときには、最後まで責任をもたなくてはなりません。

乙松さんは、家族の死という辛い出来事を乗り越え、自分が死ぬ日まで鉄道員としての責任を果たしました。私も乙松さんのように、責任感の強い人になりたいです。

暗殺の年輪

藤沢 周平 著

建築学科 佐々木 知菜

「暗殺の年輪」を読んで

——人形劇のような年輪——

人生にはたくさんの年輪がある。友情の年輪、家族の年輪、消しゴムや本にも年輪はある。それは、思い出や歴史ともいえる。

この話は、暗殺の年輪について書いている。友の裏切りや過去に消えた闇の正体など、だんだん年輪が増えていく。そして、最後に一気にその年輪が深くなる。

それがこの話のおもしろいところだと思う。

その年輪のなかに、主人公に注がれる父の非業な死による慄笑がある。主人公はつらい思いをしただろう。自分は何にもしていない。なのに、時おり感じる嫌な視線。さらに、幼いころから仲良かった友達も離れてしまった。

私だったら人が信じられなくなり、父をうらむだろう。どこか遠いところへ行っても、その慄笑が父の非業な死によるものではなく、母が体を売って主人公の命を守ったことに対する笑いであったと知る。

しかも、父の死も母の命乞いも嶺岡が大きく関係していたことを知るのだ。主人公の怒りやにくしみは相当なものだっただろう。友達が離れていく悲しみや苛立ち、我が子や自分の命の危険におびえる母、命のために我が身を汚す屈辱。

考えると悲しいどころではない。主人公が嶺岡を殺す気持ちが十分にわかる。父

も母も嶺岡が殺したようなものだ。

そして、主人公は友達の裏切りを知る。お互いの家によく通いあい、風呂にも入った仲である。その友達に裏切られたのだ。主人公は驚き悲しみ憎んだだろう。

でも、友達も裏切りたくて裏切ったわけではないと思う。昔からずっと一緒にいたのに嫌いなわけではないと思う。彼もやむをえない事情があったのだろう。

たくさんの被害をださないうえ、これからの生活のため。しかたのないことだったのだと思う。彼も苦しんだだろう。やりきれない思いで心がいっぱいになっただろう。

だが、果たして彼はいつから主人公を裏切らなければならぬことを知ったのだろうか。彼は、主人公の父や母のことを聞かされて主人公を軽蔑し離れていった。

だが、離れていった理由はそれだけではないと思うのだ。きっと、彼は主人公の父や母のことに加え、これから何をするのかも聞かされていたのではないだろうか。

そして、最終的に主人公を裏切る形になってしまふと察した彼はつらいから主人公から離れたのではないだろうか。

このように、この話はたくさんの想像をかきたてる。読んだあと、心の中に大きくて深い年輪を残すのだ。

この話の年輪のできかたは人形劇のようだ。

まず時間をかけてシナリオ、人形、装飾を作っていく。年輪を増やす作業だ。

そして、それを演じる。ただの人形や装飾だと思っていたものがつながって一つになり、たくさんのことがわかってくる。それが年輪が深まる瞬間だ。

そんな一つの人形劇を見たかのような年輪のでき方が、この本のおもしろいところだと思う。

水滴

目取真俊 著

建築学科 志毛 登

「水滴」を読んで

— 伝えることの大切さ —

小学校のときの遠足での出来事だ。集合場所まで母と一緒に、とてもワクワクしながら向かっていた。だがこういう一大イベントのとき、僕は大体忘れ物をする。

案の定、確か水筒を忘れていたのだが集合場所まであとすこし、というところで気づいた僕。ここで引き返すのもなんだか気が引けると思い、黙って気づいてないふりをしていった。

結局、母がその後すぐ気づき問いただされた末、僕は気づいていたことをうちあげた。

「なんで早く言わなかったん。」

と母に言われ、幼いながらに考えていたのだが伝えられず、あとあじの悪い感じが終わってしまった。

このとき僕がまだ幼かったというのもあるが、あのとき伝えていればまた違った結果になっていたのかも知れない。

一概に伝えるといっても方法は人それぞれで、また状況によっても変わってくるものだろう。伝えるというとは具体的にどういうことなのだろうか。

「水滴」の主人公徳正は妻のウシと一緒に畑仕事をしていた。徳正は初老にもかかわらず、酒や女遊びを日々繰り返していた。

そんなある日、徳正は原因不明の病気になってしまう。足が瓜のようにパンパンに腫れ上がってしまうのだ。時代は終戦を迎え人々は普通に生活ができるようになった頃。

だがその原因不明の病気に村の医者は何もできなかった。徳正自身は、はっきりと意識があるのだが体は動かせず、話すことも、まばたきすることすらも自由にできない。だがその不思議な足以外には、若干の熱があるだけでウシは困り果てる。

そんな中、徳正の足の親指から水滴がポツポツと溢れ出てくるようになる。村の人が怖いもの見たさでくる中、ウシは一生懸命看病を続ける。

徳正は自分の足の親指から水滴が出るようになった頃から、軍人が自分の足を舐めに来るといふ悪夢を見るようになる。気味が悪く助けを求めると声も出さず、気を失うという日々を繰り返す。だがその軍人が戦争中、仲間だった人だということも思い出す。

ウシは誰にも頼らず、決してまじめではない夫のことを看病し続け、ついに瓜のようだった足の腫れがひいた。

徳正のほうも、軍人の列の最後尾までできていた。そこにいたのは戦死したかつての友達だった。自分は生き残ってしまったという罪の意識に悩まされていた。だが、彼が徳正の足を舐め終わったのと同時に徳正は意識を取り戻していた。

徳正の感じる恐怖と心の揺れがうまく描写され、ウシの普段は気が強いが夫思いで、一生懸命看病する姿に感動した。

「明日から畑に出でて、働くんぞ。」

という徳正の言葉に、ウシへの感謝の気持ちと話せること、伝えられることへの喜びが込められていると感じた。

ウシは徳正が不安と戦っていることを知っていたのかも知れない。また徳正は、ウシが自分のことを大切に思ってくれているということを知っていたのだと思う。

お互いが口に出してはいないが、相手と心が通じ合っていたといえる。

伝える手段というのは、話す以外にも目、表情、しぐさなどがある。自分の思っていることを全て伝えるというのはなかなか難しいものである。だが僕たちには口があり、思うことができる。だから伝える努力をしなくてはいけない。

思いを形にできる、それが僕たち人間なのだと思う。

ジョン万次郎漂流記

井伏鱒二 著

建築学科 伊達 千尋

『ジョン万次郎漂流記』を読んで

—— 漁師から偉人に変わるまで ——

私がこの本を読んでみようと思ったきっかけは、大河ドラマを見ていたとき、ジョン万次郎という人が出ていたからです。ドラマの中のジョン万次郎は不思議な人でした。日本人なのに日本人ぽくない雰囲気、考えも武士の時代にしては開放的で、面白いひとだなあと思いました。実在の人物だということは知っていましたが、実際には、どのようにしてこういう考えをもったのか知りませんでした。だからこの作品を選びました。

この『ジョン万次郎漂流記』は、出漁中に遭難した五人の男性が、アメリカの捕鯨船に救われ渡米し、数十年後に日本に帰国する実話に基づいた話です。私は最初、ただの伝記だと思っていました。何故ならこの作品は、「くだった、くした」等の様に、淡々とした書き方だったからです。でも読み進めるうちに、登場人物の様々な葛藤や、異国の地での故郷への思いが詰まった作品だと感じました。

まず、遭難した時の気持ちはどうだったのだろうか？ 一人だったらどうしていただろうか？ 漂流した時点で、もう駄目だと諦めたかもしれません。でも万次郎には四人の仲間がいました。この仲間がいたからこそ、励まし合い、知恵を絞り合い、生きていく為の活力を見出せたのだと思います。そして、極限状態をのりきり、万次郎らは島を見つけました。見つけたときの気持ちはきつとこれで助かるという希望に満ちた思いでいっぱいだったでしょう。しかしその島は自分達の思いとは裏腹に断崖絶壁の島でした。そして、その島で生活し、外国の捕鯨船に助けられた時、頑張ってきてよかった、と天にも昇るような気持ちだったのだと思います。しかも、

助けてくれた捕鯨船のホイットフィールド船長はとても親切で心の広い人でした。もしホイットフィールド船長でなければ、万次郎達は強制労働、もしくは殺されていたかもしれません。異国の人にこんなに優しくしてくれる船長は、とても慈悲深い人だなと感じました。今の世の中は、人を信じるなという言葉がよく使われますが、悪い考えの人はごく一部だと思います。やっぱ、人に親切にしてあげれば、その人も幸せになれると思います。

そして万次郎らに乗せた捕鯨船は、ホノルルに着きます。このホノルルで五人の生き方、考え方が変わってきます。万次郎を除く四人は、この島で、自分の生きる道を見つけようと努力していきます。皆、日本に帰れる日を信じて、毎日生活していたのではないでしょう。万次郎は、もつと異国のことを知りたいと思い、ホイットフィールド船長らと共にアメリカに渡ります。この時代に異国のことを詳しく知りたいということは珍しかったのではないかと思います。今の私達は、海外旅行や、外国人の人が日本に観光・留学などの当たり前の光景があり、外国人の人も触れ合える機会が多くなってきました。だけど、万次郎達の時代は今と違って、外国との関わりは少なかったです。日本と違う文化、産業などを目の当たりにし、日本は小さいなあと思ったかもしれません。この異国での経験によって、視野が広がったのだと思います。その魅力に触れながらも、日本へ帰りたいという思いは捨て切れず、数十年かかっても、日本に帰れたのだと思います。あの坂本龍馬も万次郎に出会わなかったら、龍馬の考えも違って、今私達の周りも何かが違う結果になつていたかもしれません。今の日本があるのは万次郎がいたからではないかと思えました。漂流し、異国の地で暮らしても、仲間がいて、素晴らしい人達に出会えたおかげで、生きてこれたのだと思います。

私も仲間を大切に、様々な事に挑戦して、自分の世界を広げたいと思いました。そして万次郎の様に、いつか世界に出てみたいです。

2年生の部

変身

フランツ・カフカ 著

機械工学科 尾越 匠

『変身』を読んで

ある朝、夢から覚めて自分の体を見ると、大きな虫になっていたら、なんて考えたことはあるだろうか？

グレーゴル・ザムザは働き盛りの外交販売員。ある朝、悪い夢から覚めて自分の体が一匹の巨大な虫に変わっているのを発見する。

「これはいったいどうしたことだ」と、グレーゴルはその「変身」について深くは考えず、むしろ自分の仕事場での立場を心配してあれこれと考えて、その「体」で仕事へ向かおうとする。そんな時、グレーゴルの「変身」について知らない母親や会社の上司がやってきて、あれこれとグレーゴルに問いかける。グレーゴルは「変身」について特に異常だとは思っていなかったもので、問いかけに対し自分の部屋から出て答えるのだが、グレーゴルへの家族達の反応は彼が思ったものとは違って：

：
 僕はこの本を手にとり、初めて読んだとき何だか訳がわからなくなった、というか思うことが沢山あって大変だった。けれど第一に、グレーゴルはなんて不憫なのだろうと思った。朝起きて、自分の体が虫になっているなんてあまりにも酷い。しかもそれだけではなく、同じグレーゴル・ザムザであるにも関わらず変身前と変身後では家族の対応があまりにも違うのだ。そんなのは自分には耐えられないなと思

う。だが不思議なことに、まるでこの物語に深い親近感が湧くのだ。つまりそれは僕もグレーゴルと同じような状況になり、同じように耐えた、ということである。

「人の痛みがわかる人になれ」とはよく言ったものだ。この言葉をかつての僕の同級生達が知っていたのなら、と今でも思う。僕は中学生の時、とある大きな間違いを犯して、クラスメイトからの無視、いわゆる「総スカン」を受けたことがある。イジメ、と定義するには規模が小さく、期間も短かったのですが、今では軽い笑い話なのだが、あの時は本当に、変身後のグレーゴルのようだった。誰も口をきいてくれない、というより言葉が通じないのだ。広大な競争社会に淘汰されるような弱者の集団心理はなかなか恐ろしい。無視の対象者をことごとく差別し、侮辱し、その人を絶望に追いやるのだ。これは実際にその「対象者」にならないければ理解することは難しい。というよりは不可能である。そんなこととはにかく、あの時は本当に追い込まれて辛かった。僕はグレーゴルのように全く別の事を考えることはできずに、「人と人との関わりはこんなにも脆いものなのか」と中学生ながら思っていた。結局最後は、僕を無視しようと企て、それを実行し、総スカンにまで事を大きくした人間を探し出して然るべき報いを与えて、僕としては、この物語のハッピーエンドを迎えた。あの時の僕がグレーゴルだったらどうしただろうか？ それは今となってはわからないが、僕がもし逆に「変身」の中のグレーゴルだったなら、なんとかして自分の意志を家族に伝えてみると思う。これは今の自分だから思えることで、かつての、中学生の僕なら多分家族に仕返しをしようと思う。でもそれはきつと無益でバカなことだとこの本を読んで思えたのかもしれない。そしてどうせなら、という用語弊があるかもしれないが、グレーゴルにハッピーエンドを迎えて欲しい（残念ながらこの本はアンハッピーエンド）から、家族にしっかりと意思を伝えて、平和的な解決がきたらいいのと思った。

色々人生は大変で、「変身」のような酷いときもあるけれど、僕は他人に、そして自分にも、自分の意志をしっかりと伝えることができるような人に「変身」して生きていきたいとこの「変身」を読んで、感想を書いて、色々まとめてみて感じる事ができたと思う。

モツキンポット師の後始末

井上ひさし 著

電気情報工学科 中島 健吾

『モツキンポット師の後始末』を読んで

僕はこの物語を読んで今の世の中がどれだけ豊かか、またそれが当たり前になっていてそれに感謝できていないのかと思った。この本の内容は主人公の小松青年が、大学生活を送るため、東北の孤児院を離れてモツキンポット師を訪れ、聖パウロ学生寮に入寮するところから始まる。そこで日野、土田の兩名と知り合い、三人は飢えを満たすための食事の確保に奮闘努力する。本来なら笑いの題材ではないが、彼らの努力は必ず悪い方向へ向かい、せつかつかんだ生活の安定を失うことになり、最後はモツキンポット師に泣きつくという繰り返しである。例えば、出版社の倉庫の中のベッドに寝るだけのバイトでは、窓から隣の肉屋に干してあるジャガイモや肉をレーン棒を使って盗んで食べたり、地下倉庫の中で服を仕分けるバイトでは、贈り物の服を自分の汚い服とすりかえたりと必ず問題を起すのだ。こういうことが何度も続き、そして最後に師を旅芝居の舞台にまで引き出して、教会の管区長の逆鱗に触れ、師はフランスに帰されてしまうのだ。彼らは悪いことをしているのだが、問題が起る度に僕は爆笑してしまい、とてもおもしろかったので一気に読んでしまった。

この本を読んでいる途中、僕も彼らほどではないが、同じように少し似たようなことをしたのを思い出した。それは少し前、僕がアルバイトをしていたときのことだった。ポテトの注文が入ったときに上司の人に「味見をしながら塩の量を調節し

て」と言われ、何本かポテトを食べた。お客さんに渡した後、まだ少しポテトが残っていてちょうど昼を過ぎたあたりだったので、とても腹が減っていた。僕は気づかれないよう「味見、味見」と思いながら作業の合間に二、三本ずつポテトをつまみ食いしていた。これを思い出したとき、「これも絶対彼らなら同じことをするだろうなあ」と思った。逆に、僕も彼らのうちの一人だったら飢えには勝てないので絶対同じようなことをしているだろうと思った。こういったかんじで自分と彼らを照らし合わせていくうちに自分も彼らと同じような感じに思えてきて笑ってしまった。「人はみんな飢えには勝てないのだなあ」と思った。この本の中で一番印象に残った部分は、「あの当時のぼくらは、なにがなんでも喰って生きねばならぬという本能の要請はあったとはいえ、どんな些細な出来事からでも、熟練した魔術師よろしく飯の種を取りだしてくることのできる才能を備えていたのだ」という部分だ。今の時代、物や食べ物がありすぎて、「何としても喰って生きなければ」という人はほとんどいないだろう。しかし、豊かになりすぎた結果、物を大切にしなかったり、食べ物を平気で残したりといった感謝の気持ちがなくなっている人が多く、それどころか「あれがほしい、これがほしい」と欲ばかりを言っている。

この本を通して改めて今、食べることに、着ることに、勉強できることに感謝することができてよかった。この気持ちを忘れず、大切に、これからも生きていこうと思った。

人間失格

太宰治 著

電気情報子学科 溝口 聡一郎

『人間失格』を読んで

「恥の多い生涯を送ってきました」

僕はこの冒頭はこの本を読む前から知っており、いつか読んでみたいと思っていた。今年の夏、初めて読んでみて奇妙な充実感に満ちた。それはこの本の主人公の葉蔵の生き方が僕にはどうしても人ごとのように思えなかったからだと思う。

葉蔵は人間というものがなぜ生きているのか、何を考えているのか分からないために人間ほど怖いお化けはいないと思っている。しかし葉蔵は人間を思いきることはできず、人間と付き合っていくために道化を演じる。それは葉蔵にとって危機一髪の、脂汗流しての必死のサービスであった。

僕はこのような葉蔵の性格と自分の性格とが重なっている気がしてならない。学校のクラスなどでは嫌われないように振る舞おうと自分の黒く汚いと思っている部分を出さないように意識しているし、家族でさえも葉蔵のように推されたものを断れないとまではいかないが、機嫌を損ねるのが面倒くさくて、本心がばれないように振る舞っている。だが、僕は気心の知れたような人には自分の黒く汚い部分を見せている。葉蔵にも他の人に見せられない本心を見せることのできる竹一という人物がいた。そういう人がいれば道化を演じる必要がほとんどなく、共感してくれて楽になれたと思う。だから僕は葉蔵が他の人に比べて極端に変わっているとは思わない。他人をおそれ、本心を隠し、一生人間に苦しめられる。葉蔵はそんな人間ら

しい人間なのだと思う。人間とはそういうものではないのだろうか。

しかし、葉蔵は二十代前半にして自分自身に「人間失格」という刻印を打った。僕はこの部分を読んだとき、ただ、とても不憫な気持ちになった。葉蔵は二度自殺を試みるが、二回とも生き延びている。その後は本当に凄惨な不幸が襲いかかり、これ以上生きていても恥の上塗りをするだけだから死にたいと思うようになる。終わりの部分では自分を廃人とみなし、それ以降は赤毛の老女中を除いて人間とは関わることがなかったようにおもわれる。

自分を葉蔵に置き換えて考えてみるとどうしようもない気持ちになる。本当に「人間失格」の刻印を消すことは可能なのだろうか。酒と金と女、そして人間には忘れようとして忘れられないほどの恥をかかされたのだから絶対に関わりたくない。関わりたくないには死ぬか廃人として生きていく他ないと思ってしまう。だから、僕にはどうしても自信を持って可能だとは言えない。

ところで、なぜ葉蔵は「人間失格」なのだろうか。それはこの本にははっきりとまとめ書かれていなかった。僕の意見としては人間らしく生きないことが「人間失格」なのだと思う。廃人となってしまった葉蔵はもう人間と関わることはなかっただろう。きつと、食って、排泄して、寝る、それだけをして生きていったのだろうと思う。ただ、そんなことは虫にでもできるはずだ。人間と関わり合ってたかさんの気持ちになり、その気持ちがたくさん行動へと移す。それが人間の特権なのだと思う。つまりはその特権を使うかわないか、それが「人間」と「人間失格」を分けるのではないのだろうか。

僕はこの本に出会えて本当に良かった。人間の本性に近づけた気がするし、これから生きていく先では何度もこの本を読んだことを思い出すと思う。この本はきつと世界の様々な人にも、この先の様々な年代にも影響を与え続けるだろう。

博士の愛した数式

小川 洋子 著

建築学科 清水 千夏子

『博士の愛した数式』を読んで

私は数学が嫌いだ。それは、ずっと昔からである。なのになぜこの本に、この題名に惹かれてしまったのか、今でも不思議でたまらない。

ずっと数学好きの母と兄に言われ続けていた。「答えは一つしかない」「考えれば何か発見できるんだ」。そう言われても私は、数学に対して背を向けていた。私にとって数学は、頑固で近寄りがたく、まるで博士のようだと思った。

これは、八十分しか記憶を保つことができない数学博士（博士）とその博士の家に派遣された家政婦（私）とその息子（ルート）の物語。この本を読んで、数学が好きになったわけではないが、数学に対する見方や考え方が変わった。それに、この本の中の博士と私とルートから、深く優しい愛や絆を感じ、心が温かくなった。

私は中学の時、バスケットで足を怪我した。足の状態はかなりひどく、治っても軽くしかバスケットができないと言われた。当時、レギュラーだった私は、もうバスケットを本気でできないということと、チームの皆に對する罪悪感で目の前が真っ暗になった。しかし、チームの皆や家族、たくさんの方の支えによって、怪我と向き合うことができ、またバスケットができることを信じてリハビリや筋トレをがんばることもできた。そのおかげで、最後の試合に少しだけ出られたのである。私が怪我をして落ち込んで、ようやく前を向いたとき、私が見つけたのはたくさんの方の支えと優しさだった。この本にも、私とルートが博士と向き合い、博士の愛した数学たちと向き

合う姿がある。そうしたものと向き合う中で、互いを心配したり、泣いたり、相手がショックを受けたことにショックを受けたりするのである。いつもは逆の立場の博士が私に對し、「大丈夫」と言って手をさすった場面は一番心が温かくなった。その姿は「私」とよく似ているように感じた。まるで「博士」は「私」を知っているかのように思えた。博士と私とルートの間には、限られた八十分という記憶なんて関係ないというほどの深い愛があると感じた。それは相手の気持ちを理解しよう、相手の気持ちに応えようという思いや以上のやさしい愛だ。「私」と「ルート」が向き合い、見つけたものは愛と絆だと思ふ。

「そう、まさに発見だ。発明じゃない。自分が生まれるずっと以前から、誰にも気づかれずそこに存在している定理を、掘り起こすんだ。神の手帳にだけ記されている真理を、一行ずつ、書き写してゆくようなものだ。その手帳がどこにあつて、いつ開かれているのか、誰にも分からない」。私が最も印象に残った言葉だ。この言葉は数学だけでなく世界にあるたくさんの方に当てはまると思ふ。

私は数学が嫌いだ。それは、ずっと昔からである。だからといって背を向けてはだめだ。真剣に向き合つてはじめて、何かが見えてくる。だから私は、数学でも何でもちゃんと向き合うことからはじめていこうと思ふ。

この小説はこのことを教えてくれた気がする。

3年生の部

息子への手紙

中田 武仁 著

機械工学科 横部 健

『息子への手紙』を読んで

僕はいつも読書感想文のために読む本は、いい加減に流し読みして適当に感想を書いてしまう。自分から読みたいという気持ちになった本でないあまり読む気がしないからだ。しかしこの本は違った。一度いい加減に流して読んだ後、もう一度しっかり読まなければならないという気持ちになった。そしてもう一度最初から読み直した。この本で、著者が読んでいる人に伝えたいメッセージはとても重い。この著者は、ボランティアでカンボジアに行っていた息子を殺された父親である。この人に降りかかった不幸はあまりに大きすぎる。僕には想像できないレベルである。そんな人が訴えるメッセージに特に大きな不幸を味わったことが無い僕が軽々しく共感して良いのかと思った。

この本は著者である中田武仁さんの息子である厚仁さんが亡くなったという知らせが来たところから始まる。そこからは淡々と息子が生まれたところから大人になってカンボジアへボランティアに行くところまで過去を振り返って書いている。父がとても息子を大切に育ててきたことが文章の一つ一つから伝わってくる。読んでみると、僕もこんな風に大切に育てられたのかなと思った。武仁さんはとても真面目な人で、厚仁さんはとても真っ直ぐに育ったけれども、僕は親の願った通りに育っているのかなと思った。少なくとも僕は誰かのためにボランティアをしたりすることはできない。他人のために自分を犠牲にするという心を持

っている時点で、僕はこの人達にかなわないと思う。

厚仁さんは生前、「カンボジアに行こうとしたときはカンボジアの平和のために役に立ちたいと思ってたけど、実際にはカンボジアの人から学ぶことの方がずっと多いんだ。」という言葉を残している。この言葉はとても印象に残った。発展途上国へボランティアに行くとき、見下すほどまではいかないかもしれないが、助けてあげるという風に少し上から目線で考えている人は結構いるのではないかと思う。しかし厚仁さんは完全に対等に接し、むしろカンボジアの人たちから学ぶことがあると言っている。治安の良い先進国は逆に失っている物もあるという意味で言ったのではないか、と思った。真意は分からないが、とても考えさせられる一言だった。

厚仁さんが亡くなったという知らせが届いたとき、父の武仁さんは絶望したという。頭の中が空っぽになり、数分間声が出なかったらしい。しかしまだ特定されていない厚仁さんを殺害した犯人捜しだけはやらなかった。厚仁さんがそれを望んでいないと思ったからだという。当時カンボジアで敵対していたポル・ポト軍とプノンペン政府軍のどちらの肩も持ちたくなかったのだそうだ。戦いに正義も味方もない。ここを読んだとき、僕は武仁さんの器の大きさにびっくりした。僕はこんな冷静なことは言えないと思う。自分の知っている人が殺されたりしたら、とにかく犯人捜しをして憎むだろう。しかし武仁さんはそれをしなかった。厚仁さんの信念を貫くために。

僕はこの本を二回読んだ。しかし、武仁さんの伝えたいメッセージを100%読みとることはできなかった。けどこの人達の人間的な器の大きさは十分に分かった。僕はこれから生きていく上で、自分の感情だけで動かず、周りの状況をよく見て判断できるようになりたいと思う。

何でも見てやろう

小田 実 著

電気情報工学科 川口 竜弥

『何でも見てやろう』

筆者の小田実氏は、世界を「何でも見てやろう」という題名のとおり何でも見ることで、自分の故郷の日本を知ることができたそうだ。その一つに、ある予備校の英語のテストで、日本人は手先が器用で、模倣の才が素晴らしく、勤勉なので、短い年数で西欧に追いつくことができたということなど、とにかく日本人をえらく賞讃した文章が英文で書かれていて、それを要約しなさいという問題があった。その英文は難し過ぎたが、日本のことが書かれていることは理解できたので、学生の半数は、自分の中にある“日本”の常識に従って要約をしていた。「日本人は、手先が器用なだけで、物真似がうまいばかりで駄目です」とか、「日本人は働くことだけして、西洋人のように生活を楽しまないから駄目です」など。学生たちの“日本”から日本を知る一つの出来事となった。

予備校生の感じていた日本の良くないと思うところは、外国人にも良くないと思われているのか。筆者は各国の人々から日本の印象を聞いている。「ニホン人はとても親切だ」「ニッポンの製品は出来がいい」「ニホン人は忙しくても、真面目に勤勉に働いて素晴らしい」「急速に成長して、西洋に追いついたニホンはアジアの誇りだ」と、外国人の中でのニホンは実に好評価であった。外国人の視点は我々と随分違っている。

その違いは単に価値観や国民性から生まれたもの

だけでなく、我々が「ニホン」に自信を持っていないからではないのか。それがあの“日本”を作らせたのではないかと思うのだ。僕が小学生の時、学校から親に大事な書類を入れて渡すための茶封筒を先生に返しそびれてしまったことがあった。怖がりの僕は先生に渡す自信がなくて、茶封筒を見るたび憂鬱になったが、母に「こんなことで先生は怒らない。早く渡して来なさい。」と言われて次の日、先生に茶封筒を渡したら、先生はただただそれを受け取った。その時の呆気にとられた気持ちは、僕と同じ“日本”の常識を持った筆者も外国人に日本の印象を聞いたとき感じていた。

筆者はさらに日本人の自信のなさの原因をもう一つの日本らしさとともに伝えていた。筆者が帰国した時（五十年前）に、日本が島国であることをひしひしと感じたようであった。島国だと文化や人々、経済や政治などの交流が少ないので、常に内向きの考え方になってしまうらしいということだ。予備校生の答案だっただけでその内向きな考え方のみで“日本”の常識が影響していた。外国の人たちは国境が陸続きで、色々な人種、言葉、文化と接することが日常的なので、考え方も柔軟性があり寛容であるように思う。筆者が何でも見てやろうと世界に飛び出したのも日本人の一人として、外からの視点を体験したかったからである。母があの時言った一言も外からの視点で大事なアドバイスだった。その一言で勇気を出せて行動できた。筆者が世界を見回った経験は、予備校生たちと考え方が変わらなかった出発前の自分をたくましくさせたのだった。

まだまだ未熟な僕には「何でも見てやろう」の精神が必要である。何でも見ることは、自分の中で

“日本”の常識を打ち破った筆者のように自分の選択肢を自らが増やすきっかけになるからだ。

センス・オブ・ワンダー

レイチェル・カーソン 著

環境都市工学科 菅 聡司

『センス・オブ・ワンダー』

この本に出てくるレイチェル・カーソンは地球の素晴らしさは生命の輝きにあると信じている。そしてその素晴らしさを甥と共に深く見つめていくという内容である。

私は自然や生物などまだまだ未知なるものが多いといったことに興味があり、今まで様々な書物や映像に触れてきた。しかし、この『センス・オブ・ワンダー』ほど自然の魅力や神秘さを生々しくよみがえらせてくれたものは未だかつてなかったように思える。それほどまでにこの本は私を驚嘆させた。

私も子供のころはレイチェルのように、大人達が気にもとめず見落としていた自然の中の小さな美しさに関心を持っていたはずだ。私に限らず誰も幼き頃持っていた豊かな感受性をどこで失ってしまったのか。何故レイチェルのような感性を持ち続けられなかったのだろうか。その理由は紛れもなく今まで私が生きてきた中で出会った人、周りの環境によるものだといえる。レイチェルの甥のように、幼少時代から自然とともに過ごし、自分と同じようにその魅力を感じとってくれる存在がいれば、物事を様々な角度から見ることのできる感性を磨くことができたかもしれない。だから私は次の世代の子供達には、地球上のあらゆる神

秘に興味を持ってもらいたい。そしてそれを守って、こうという思いを、自発的に持ってもらいたい。現代の若者のように環境問題や、その他の社会問題に非協力的な人間にはなってほしくない。私自身そのような人間でないとは言えないので、これから少しずつ修正していくつもりである。

レイチェルはこの作品中で人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくことの意義についてこう語っている。

「地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力を保ち続けるでしょう。」

この言葉は私には理解できない。おそらくそのような思いを持ちながら生きてきた人間でない限り、この言葉の真の意味は捉えられないのだろう。

結局、私がこの本を読み感じたことは、後悔に尽きるように思える。幼少時代にこの本を読んでいれば…。いや、読めなくとも本の題意を伝えてくれる人が身近に存在していれば、もっと違う人生になっていたのではなかろうか。そして、自らがそのような幼少時代を過ごしていれば、次世代の子供にも、上手に伝える能力が発達していただろう。

しかし、後悔ばかりもしてられない。今私にできることは何か。少しでも多くの人に、自然の素晴らしさ、恐ろしさ、奥深さ、そして環境問題の深刻さを伝えていかなければならないのではないか。そのためには、私は自分の命も惜しまない。それが、この『センス・オブ・ワンダー』を読んだ私に課せられた試練なのである。

裁判官はなぜ誤るのか

秋山 賢三 著

建築学科 山田 萌子

『裁判官はなぜ誤るのか』

裁判官は、言わば法律のプロ。その裁判官が誤ることがあるのか。もちろん、裁判官も人間であるから、誤ることはあると思うが、冤罪というものは、ほとんどないものだと思っていた。しかし、実際は自分が思っていた以上にあるものだった。それなら、なぜ裁判員制度が導入されたのかが分からない。プロである裁判官が誤る裁判を、一般市民がともにすることで、冤罪を増やしてしまうことにならないだろうか。

この本では、裁判官と弁護士、二つの立場で事件に向き合ってきた経験を持つ著者が、関わってきた事件を含めながら、冤罪の原因を探り、「冤罪を生まない裁判所」にするための提言がなされている。

具体的な事件として、徳島ラジオ商殺し事件や袴田事件が挙げられている。読んでいて初めて、冤罪の恐ろしさを理解した。どちらも証拠や状況を読んでいる限り、私でも無罪と思う事件だったが、有罪と判決された。徳島ラジオ商殺し事件で犯人とされた、富士茂子さんは、無罪を主張し続けたが、なかなか認めてもらえず、最終的に無罪を言い渡されたのは、茂子さんが亡くなった後だった。茂子さんは、夫を殺された被害者であったのに、夫を殺したとして、有罪判決を受け、結局、死ぬまで夫を殺した罪を着せられたままだったのだ。袴田事件の袴田さんも、未だに東京拘置所で、死刑執行に対する恐怖をかかえ、拘禁症精神障害を患いながらも、無罪を主張し続けている。

このように、冤罪はその人の人生を狂わせてしまう。

また、その家族にも悲惨な人生を歩ませてしまう、あってはならないことである。冤罪を生み出す原因としては、私でも耳にしたことのある、「疑わしきは被告人の利益に」が実践されなかったことや、キャリア裁判官の経験則不足などがある。裁判官の経験則というのは、裁判官の生活にも問題がある。裁判官は転勤人生であり、その多くは官舎などで固まって居住しているため、閉鎖的な世界であり、裁判官の市民の実生活上の経験則を不足させている。このことなどが、一般市民とともに裁判を行う、裁判員制度が導入された一つの理由である。市民は「現実」に立脚しながら「生活」というものと闘っている、つまり、被告人と同じ位置に立っているから、「実生活」と比べながら判断できるのである。

私は今まで、法律のプロがいるのに、わざわざ市民が裁判をする理由が、裁判員制度を導入する理由が、分からなかった。裁判をするということは、やはり人の人生を左右することになる。それに、裁判員制度で扱うのは、重大な犯罪である。その中に、死刑判決を言い渡すこともあるだろう。もし、私が裁判員裁判に参加することになった時に、死刑判決を言い渡すことになったら、私はずっと罪悪感に悩まされると思う。その人がどんなに悪いことをしていたとしても、人の死を決めてしまうのだ、多少なりとも罪悪感は生まれるだろうと、私は思っていたので、裁判員制度に否定的だった。しかし、この本を読むことで、ニュースやドラマでしか見たことのなかった裁判について、以前よりも理解することができたし、裁判員制度が導入された理由についても知ることができたので、前よりは否定的な考えではなくなったと思う。

冤罪を生みださないために、実生活は大切なことだと分かったので、これからの日常生活で物事を誤らないためにも、いろいろな経験を積み、様々な角度から物事を見ることが出来る人間になりたい。

4・5年生の部

格差社会の居住貧困

日本住宅会議 編

建築学科 横山 貴史

『格差社会の居住貧困』を読んで

今、日本は国規模で考えなくてはならない程の居住貧困である。かつて所得格差が小さく、一億総中流といわれる、中間層が多くを占める平等社会であると内外ともに認識されていたこともあって、にわかには信じ難い話であると誰もが考えることだろう。

現に私もそうである。裕福な暮らしではないものの、毎日の苦もなく生活している。住居空間に視点を置いてみるとより顕著になる。

起床し、朝食を食卓で囲む。帰宅し、浴室で一日の疲れを癒す。寝床で明日へ備えて休眠する。当然のことと捉える人もいるだろう。

しかし、その最低限の生活を保障されてない住宅困窮者が、近年日本で増加しているのは紛れもない事実なのである。その背景には、国民の所得低下に対する住宅供給の増加の他に、低所得者向けの公営住宅の需要が増加しているにも関わらず、維持管理費等の問題から募集戸数が減少していることも挙げられる。

こうした住宅困窮者の増加、つまり所得格差の拡大

は、ネットカフェ難民や路上生活者問題など、住宅の面でさまざまな問題を引き起こしている。また、これらだけでなく、大都市郊外部での高齢化、それに伴う老人の孤独死問題、片親世帯・障がい者・外国人の居住問題など、日本は多くの問題を抱えている。

では、これらの住宅問題をどのようにして解決していくのか。

この本の、「住宅は生活するうえで欠かすことのできないもので、社会保障、福祉政策の重要な一つの分野として位置づけることが必要である」という部分からもわかるように、国の政策と一体となって住宅問題に取り組むべきであると、私は考える。

空き家となっている民間借家を借り上げて元ホームレスに提供する、持家のリスクが高い低所得者向けに賃貸住宅政策の拡充をするといった政策を進めることで、住宅困窮者を減らし、日本の抱える住宅事情を少しでも解消していくことを目標とすべきであるといえる。

もちろんこれは容易なことではない。膨大な財政赤字を抱えている日本は、住宅政策に大きな財産配分を求めることができない。そのためにも、市民がさまざまな工夫をしながら住宅問題に取り組んでいくべきである。私達が、居住の権利を日本国民の基本的な権利の一つとしてしっかりと定着させ、格差のない、安心して暮らすことのできる住居を持てる社会を目指していくべきだと私は思った。

夜は短し歩けよ乙女

森見 登美彦 著

機械工学科 安田 祥隆

『夜は短し歩けよ乙女』を読んで

「路傍の石に甘んじるのか。」私は、なんども出てくるこの台詞が印象に残った。

物語には、二人の主人公がいる。一人は偏屈で自尊心旺盛な「私」。もう一人は常に心を躍らせて前へ進む「黒髪の乙女」。この二人の視点で話は展開する。「私」は「黒髪の乙女」に一目ぼれし、いかに恋仲になるかを画策するのである。

この本を読んだなら、ほぼすべての人が「黒髪の乙女」のようになりたいと思うだろう。いつも、自覚なしに物語の中心にいる彼女はとても楽しそう。一方の「私」はいつも物語の端で「黒髪の乙女」にかかわろうと必死に画策しては、変な事件に巻き込まれ、不愉快そうにしている。

さて、前述の台詞はもちろん「私」のものである。彼が行動を起こすとき、そう自分に問いかけるのである。彼の行動は一貫している。「黒髪の乙女」と恋仲になりたいという意志の元に行動するのだ。自分は、こ

こで終わっていいのか。自分は路傍の石なのかと、自問自答しながら。

物語の人物が主人公になるには何が必要なのか。それは、「黒髪の乙女」が持つ、常に心躍らせ前にずんずんと進む力でもあるだろう。しかし、「私」が持つ、状況を不愉快に感じながらも、それに抗い物語の中心であろうとする意思でもあると思うのだ。その意思が、「路傍の石に甘んじるのか」という台詞から読み取れる。

現実において、物語の主人公になるとはどういうことか。本になるような成功を収めることなのか、私は違うと思う。物語の主人公になるということは、自分の思い描く未来に到達することなのだ。それは、将来の夢なのか、恋愛なのか、人それぞれだろう。しかし、そこに存在するのはひたむきな努力であることに間違いはない。たとえ、少しズルいと思われることでも、真っ当にがんばることでも未来を思い描いてそこへ向かうことなのである。

私は今年、就職活動をした。自分が希望した会社に就職するために、志望動機を考え、履歴書を書き、面接練習をして挑み、合格できた。受かったときは、素直にうれしかったのと同時に、自分の物語で主人公に近づいたのだと思えた。

これからも、私は自分が「路傍の石」にならぬように、努力を重ねて主人公を目指したいと思う。

【表紙】 灰ヶ峰からみた呉市の夜景

写真は灰ヶ峰（標高 737m）の山頂から南側の呉湾を 2011 年 12 月に撮影したものです。灰ヶ峰からみた呉市の夜景は、広島県を代表する夜景スポットの一つです。皆さんもぜひ一度訪れてみてください。

(撮影：呉高専建築学科 1年 石井拓也)

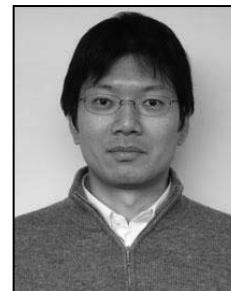
私の推薦図書

「しがらみ」を科学する（高校生からの社会心理学入門）

山岸俊男 著
筑摩書房

中国化する日本（日中「文明の衝突」一千年史）

與那覇潤 著
文藝春秋



自然科学系分野 林 和彦

学生の学校での価値観は、クラスやクラブの他人の価値観に影響を受けてしまう。他人から影響を受けることは、人としては当然なことであるが、インターネットによって瞬時に多様な価値観を共有できる現在において、また学生からの学校や教員への信頼が低下している現在において、学生がクラスから受ける影響は相対的に低下しているだろうと勝手に思い込んでいた。つまり、クラスを無視して、自分の価値観で自分勝手に振舞う学生が多くなっていると思い込んでいた。しかし、現実はどうもその逆であるようだ。

学生は無自覚にクラスの価値観を信頼し、自分の言動を決めてしまう傾向がある。それは、なぜだろうか？社会心理学からの答えの1つが、「しがらみ」である。本書によると、社会を「そこで生きている人にとって、あるしかたで行動をせざるをえないようにしている「しがらみ」の集まり」と説明している。これは、山本七平氏によって指摘された「空気」と同じ考えである。「場の空気を読む」などと使われる「空気」のことである。なるほど、クラスという社会では、そのクラスの場に適用される「しがらみ」が形成されていると言うことである。これほどのような社会でも言えることで、学生特有の現象ではない。

場の「空気」によって価値観が決まってしまう傾向は、「村社会」で生きてきた日本人には根強く残ってい

ると言われている。それでは、そのような日本人の傾向は、いつごろから形成されてきたのだろうか？「中国化する日本」では、江戸時代に村社会システムが完成したと説明されている。つまり、日本人の村社会根性は、400年以上の伝統があるのである。学生が、この400年間の伝統に基づいたクラスと言う村社会で生きていけば、自然とクラスの「しがらみ」の中で言動を決めてしまうのは道理である。また、村社会では、現状の安定の維持に力が注がれるので、細かい文句を言う者はいても、原理原則を覆すような言動を取る者はいない。いたとしても、そう言う者は村から疎外されてしまう。このような傾向も、学生に見受けられる。インターネットによって、ネット上に仮想村を想定して価値を共有できる環境にあっても、学生は現実の村社会を容易には抜け出すことはできない。

この「しがらみ」や「村社会」自体は、一方的に批判される事柄ではない。社会のありようの1つなので、良い面もあれば悪い面もある。問題は、学生が無自覚に肯定してしまうクラスの価値観が、学生の人生を考えると、往々にして学生の不利益になっていることが多いことである。これを解決するには、この2書では不十分で、行動学や心理学の手助けが必要となる。それは今後の自分への宿題である。

プログラムはなぜ動くのか ●知っておきたいプログラミングの基礎知識●

矢沢久雄 著

日経BP社



機械工学分野 山田 祐士

この本はこれからプログラミングを始めたい人や、スキルアップを目指す初級プログラマ、中級のパソコンユーザ向けに、どのようにしてプログラムが動作しているかを解説したのですが、情報処理などの授業でコンピュータやプログラムの勉強をした本校の学生であれば、十分に内容を理解できると思います。プログラムがメモリにロードされ、CPUによって解釈・実行される仕組みが、多数の図を使って、順序だてて解説されており、パソコンの中身がイメージできるようになります。この本を読み終えたとき、これまでにいろいろな授業などでバラバラに習った知識がパソコンの中身を通して、つながるような感覚を得られる人もいるのではないのでしょうか。

前半は、最初にCPUの解説があり、その内部にあるレジスタや制御装置、演算装置がプログラムに対応してどのように動作するのかという説明から始まります。そして2進数による四則演算、論理演算の説明、小数計算における問題点、またメモリやメモリとディスクの関係等が、ハードウェアと関連付けられて解説されています。授業などで習った知識がコンピュータの中でプログラムの動作する仕組みを理解する上で必要であったことに気がつくと思います。

後半は、プログラムが動く環境や、OSとアプリケーションの関係など、日頃Windowsを使っていて疑問に思っていたOSの違い等について触れた後、少し内容が難しくなり、アセンブリ言語やハードウェア制御の方法など、ハードウェアの話になります。このような流れで解説が進みますので、Windowsに対する素朴な疑問が解消される一方で後半のアセンブリの章などでは、内容がすこし難しく感じられます。プログラムを本格的に作ろうという人でなければ軽く読み飛ばしておいてもよいでしょう。

流れとは別に前半と後半の途中にあるデータ圧縮のしくみや最後にある人工知能について触れる章やコラムなども、ソフトウェアの素朴な疑問が解消されて楽しめると思います。また、むずかしいと感じる個所もありますが、全体的にはサクサク読み進めることができ、親しみやすく感じられると思います。

このような本を読み、情報処理の授業にこれまで以上に興味を持ってもらえると思うています。また、将来はプログラマになりたい人には勿論ですが、パソコンの中身をブラックボックスのままにしたままにせず、きちんと理解したい人には特にお勧めします。

歴史小説、ミステリー、自己啓発書など

環境都市工学分野 山岡 俊一



「絶対に読んでほしい」という本はない。というより、私自身がそのような本にまだ出会っていないと思う。紹介する本を1冊に絞り込めないため、今までに読んで面白かった本、参考になった本などをいくつか紹介したい。

大学生のころによく読んだのは司馬遼太郎の歴史小説である。中でも、新撰組の土方歳三を描いた「燃えよ剣」、斎藤道三と織田信長が主人公の「国盗り物語」、黒田官兵衛の生涯を描いた「播磨灘物語」が面白かった。内容の面白さに加え、“地理”の面白さもある。私の出身は愛知県名古屋市であり、この地域は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康など多くの戦国武将が活躍した土地である。そのため、私にとっての身近な地名が作品の中に登場するのである。例えば「国盗り物語」では、織田信長が今川義元との決戦の地である桶狭間に向かう途中、熱田神宮で戦勝祈願をする。その時、“春敲門をくぐり”、“井戸田村を通して”というような記述があり、“井戸田”という名古屋市民でもほとんど知らない実家のすぐそばの地名が出てきて感動した覚えがある。また、私の実家の住所は名古屋市瑞穂区春敲町●丁目○番地で、“春敲町”と“春敲門”には何か関係があるのか調べたら、やはり“春敲町”は熱田神宮の“春敲門”から付けた町名だった。このような楽しみ方もある。学生の皆さんも地元の武将の小説を読んでみてはいかがだろうか。

一時、森博嗣のS&Mシリーズ（「冷たい密室と博士たち」や「夏のレプリカ」など）やGシリーズ（「 τ になるまで待って」や「 θ は遊んでくれたよ」）なども良く読んだ。森博嗣はN大学工学部の建築の研究者でもある。さらに作品の中で、N大学（N市にある旧帝大？）、N工大（N市にある国立の工業大学？）、C大学（N市のお隣の春日井市にある大学？）など私にとって身近な大学が事件現場になったり、これらの大学の学生や先生が主人公であったり重要な人物として登場する。私にとって分野や地域が身近であることから楽しく読んだ。これらは工学を学ぶ学生にお薦めの推理小説である。

呉高専に来てからは新幹線等での出張が多く、移動中にはいろいろな本を読んで時間をつぶす。研究関連の書籍を読むことが多いが、疲れている時はさらっと読めて楽しめる山田悠介（「特別法第001条 DUST」や「ドアD」など）の作品をよく読んだ。読書が苦手な人にお薦めである。

また、就職してからは自己啓発書もよく読む。例えば、ジャーナリスト田原総一朗の「田原式つい本音を言わせてしまう技術」、勝間和代の「断る力」、落合博満（前中日ドラゴンズ監督）の「采配」などはいろいろ考えさせられるものがあった。学生が読むには向いていないかもしれない。しかし、人生経験豊富な方が書かれた本には、生き方に悩んだ時や仕事の参考になることが多いので自分に合った自己啓発書もたまには読んでもらいたい。

私にとって、本は楽しむもの、時間つぶしの道具、幸せな人生を追求するためのヒントを得るものであり、いろいろな役割を担ってくれる便利な存在である。学生の皆さんにも、本をうまく活用してもらいたい。

<紹介した図書一覧>

- 燃えよ剣 司馬遼太郎著 新潮社
- 国盗り物語 司馬遼太郎著 新潮社
- 播磨灘物語 司馬遼太郎著 講談社
- 冷たい密室と博士たち 森博嗣著 講談社
- 夏のレプリカ 森博嗣著 講談社
- τ になるまで待って 森博嗣著 講談社
- θ は遊んでくれたよ 森博嗣著 講談社
- 特別法第001条 DUST 山田悠介 文芸社
- ドアD 山田悠介 幻冬舎
- 田原式つい本音を言わせてしまう技術 田原総一朗著 幻冬舎
- 断る力 勝間和代 文藝春秋
- 采配 落合博満 ダイヤモンド社

行事報告 平成23年度第2回ブックハンティング

学生会 文化副委員長

麻村晶子



昨年、12月2日にブックハンティングへ行ってきました。前期は4・5年生が行き、後期には1～3年生が行く事になっているので、今回は1～3年生の各クラスの代表2人と一緒に広島駅前 ジュンク堂書店へ向かいました。

ブックハンティングに参加する学生は読書好きの人もいれば、たまたま行く事になった人もいたりするので、学生間の参加意欲が異なっている事が多々あります。しかし、実際に書店へ行き、売り場に入るとその雰囲気は一転し、みんな真剣に、そしてとても楽しそうに本を物色し始めます。この企画では普段は高価で手が出ない、専門分野の参考書や作品集などを含めた本を1人1万円まで選ぶことができます。そのため、参加している学生

それぞれの好みや趣味が色濃く反映された本が選ばれてきます。選んだ本は先生方にチェックしていただいてから実際に購入するかどうかが決まるのですが、中でも専門書の購入の許可・不許可は毎回、紛糾します。専門教科をマンガで解説した本や、実用的な資料集のようなものなどが選ばれてきますが、中には先生方の許可を得られないものもあり、学生と先生の小さなバトルが繰り返られることもあります。しかしブックハンティング終了時刻には選ばれた大半の本が許可され、それらを選んできた学生の満ち足りた表情が見られます。

ブックハンティングは放課後にある企画なので、学生の目には“面倒な企画”として映ってしまうこともあると思います。しかし、「1万円分の“専門書”を含めた本」を自分の好きなように選んで読む事が出来るという機会は、そんなにあるものではありません。それに、大きな本棚に自分の習っている分野の専門書が、ずらりと並んでいて——そんな光景を目の当たりにしたら思わずわくわくしてしまうのではないのでしょうか??

来年度のブックハンティング。是非、みなさん参加してみてください。

ブックハンティング図書紹介

13歳からはじめる ゼロからのC言語ゲームプログラミング教室 初級編

N・T

題名の通り、13歳からプログラミングができるように書かれた本です。諸事情により、入門編だけが図書館に入る事になりましたが、プログラミングに興味がある方にオススメです。

レイテ沖海戦 (上巻)

M・S

真珠湾攻撃から破竹の勢い猛攻を続けた日本軍だったが、ミッドウェイ海戦での大敗で状況は一変し、しだいに敗色が濃くなる。レイテ沖海戦は、戦史に残る日米最後の大海戦である。愛する人を守るため、死んでいった若者達の魂がここにある。

またたび

D・C

いまや国民的アニメとなっている“ちびまるこちゃん”の作者、さくらももこさんのエッセイです。ほのぼのとした気分が心が癒されます。

シャーロック・ホームズの大冒険 (上・下)

O・T

僕がこの本を選んだ理由は、前にこの本を読んだことがあって、まるでホームズや助手のワトソンと共に事件を調査するように読むことが出来て、とても面白かったからです。

ジェノサイド

H・Y

息子の為に命を懸けて戦う男と不治の病に苦しむ子供達を救うために命を懸けて戦う青年の物語。作者が綿密な取材をして、描いているからか、実際に起こったのではないかと、というくらいリアリティがあって読みごたえがありました。

源氏物語 千年の謎

N・K

12月10日(土)に公開された映画だが、どんな内容か気になったので本を読んでみようと思った。ちょうど古典でも、藤原氏一族の話が出てきた時に、紫式部も出てきたので少し興味があった。

Perl CPANモジュールガイド

F・Y

Perlがある程度書けるようになった人向けのプログラム本です。Perlモジュールを紹介している本ですが、サンプルコードも豊富でとても参考になります。

妖怪アパートの幽雅な日常（1～6）

S・H

この作品は講談社YA!ENTERTAINMENTから刊行されている作品が文庫化されたもので、産経児童出版文化賞、フジテレビ賞を受賞しています。とても読みやすい作品なので読んでみてはいかがでしょうか？

骨から見る生物の進化 EVOLUTION

O・N

この本を見た時、自分に一番身近にあって一番知らないものは骨なのではないか？と思いこの本を選択しました。

新しい住宅デザインの教科書

Y・N

建築学科では2年生で、住宅設計をするが、基本的な住宅デザインがわかりづらく、初めて設計するのに見当がつかなかったから、これから学ぶ人に役立ててほしい。

先輩絵師に学ぶ作画テクニック ILLUSTRATION公式メイキング講座

S・T

高専ではあまり芸術的な授業がなく、基本的に朝から晩まで理系の授業ばかりです。なので私は皆さんに芸術的な方面にも興味をもってもらいたくてこの本を選びました。ぜひ皆さんも絵を趣味にしてみてください。

空の上で本当にあった心温まる物語（1・2）

N・T

飛行機の中で本当にあった心温まる出来事を紹介している本です。飛行機の中という決して広くない空間に色々な人々が乗っているせいか、色々な出来事が起きます。その出来事の中でも特に感動できるものを紹介していて、涙なしには読めないような本です。ぜひ、読んでみてください。

新理系の化学<上>、<下>

S・T

高校生向けの本ですが、難関大学志望の高校生が使う本なのでレベルはかなり高い本です。化学を暗記に頼らず理論をきちんと理解したい人にオススメです。

年をとったワニの話—ショヴァー氏とルノー君のお話集<1>

O・S

実は選んだ本人も、この本自体は読んだことがなかったので、映画化されていることだけは知っていました。その映画というのは「頭山」や、「おかあさんといっしょ」で昔放送されていた「パクシ」シリーズを生み出した山村浩二さんの監督作品「年をとった鰐」なのです。「年をとった鰐」は2006年の夏に公開された13分間のアニメーション映画で、世界中の様々な映画祭で最優秀賞を授与されています。この本を読んで、アニメーションの方にも興味を持っていただけたら幸いです。

黒い兄弟<上>、<下>

O・S

昔のヨーロッパでは、貧しい家の子が煙突掃除夫として売られることがよくあったそうです。この物語の主人公もそうしてスイスの村からミラノへ売られてしまいます。「黒い兄弟」の黒は煙突の煤のことで、黒い兄弟というのは主人公の少年がミラノで出会った同じ境遇の少年たちのことです。テーマはズバリ、勇気と友情です。この物語を読んで、皆さんの内に何か温かいものが残れば、と思います。

危ないデザイン

A・A

建築学科では製図の時間に自分で建物を設計する課題がある。しかし、建築概論や建築計画で学習した内容だけでは分からないこともあるし、内容を忘れてしまっていることも多々ある。だからイラスト入りでわかりやすい、手軽に分かることを調べられる資料として使えろと考えて選んだ。

編集後記

「図書だより第52号」はいかがでしたか？今まであまり図書館を利用していなかった人が「図書だより」を読んで図書館に興味を持ち、図書館の常連さんになってくれることを願いながら編集しました。図書館は皆さんに利用されてこそ価値があるものです。図書館に対するリクエストがあれば遠慮せずにお知らせください。

最後に、今号の発刊にあたりご多忙にも関わらず原稿を執筆していただきました方々に心からお礼申し上げます。